日本大学薬学部校友会

# 桜薬会会報

32

キャンパスのサクラ

# 劇症型A群レンサ球菌感染症

日本大学薬学部微生物学研究室 助教授　井 口　法 男

“人喰いバクテリア”とはよくも名前を付けたものである。ネーミングしたのは英国の新聞で"flesh eating bacteria" または "killer bug" という。劇症型A群レンサ球菌感染症 severe inavasive group A streptococcal infection の病原菌のことである。もちろん人喰いバクテリアといってもバリバリ人を喰うわけではないが、発症して非常に短時間のうちに筋肉の融解や壊死が起こることから連想したものだろう。ネーミングの良さ？もあってか1994年に英国や日本で報道されて一躍有名になったことは覚えておられる方も多いだろう。とくに基礎疾患をもたない健常成人が突如発症し、またたく間に死の転帰を迎えるこの疾患は、上記以外にレンサ球菌性毒素ショック症候群；Streptococcal toxic shock syndrome (STSS) とも、Toxic shock-like syndrome (TSLS) ともよばれ、現在では独立した症候群として認められている。

**起因菌と、主な産生毒素・酵素**

起因菌（原因病原菌）は$\beta$－溶血性レンサ球菌のうち、A群に属する化膿レンサ球菌で、学名はStreptococcus pyogenesである。レンサ球菌はグラム陽性の球菌で、顕微鏡で観察すると鎖が連なったような形態を示すことから付けられた名前である。臨床上よく用いられる“溶血性レンサ球菌”あるいは“溶連菌”という名前は通称であって、分類学上の学名ではない。にもかかわらず、血液寒天培地上の集落 (colony) の周囲にみられる溶血は目につきやすい性質であり、現在でもこの通称は散見される。レンサ球菌は、血液寒天培地上で集落を中心に透明な溶血斑を作る$\beta$－溶血群と、集落を中心にメトヘモグロビンによる緑色溶血斑を作る$\alpha$－溶血群、および非溶血群（$\gamma$－溶血群）に大別される。$\beta$－溶血群は、さらに菌体細胞壁を構成するN－アセチルグルコサミンとラムノースからなるC－多糖体 (C-carbohydrate) の抗原性によりA－H群に分けられている。このうち、A群レンサ球菌はヒトに対する病原性が強く、種々の毒素や酵素を分泌する。

溶血毒素としては、酸素に不安定でSH還元剤で活性化するストレプトリジンO（SLO）と、酸素に安定なストレプトリジンS（SLS）の2種類が知られている。前者は分子量 50,000～100,000の酸性タンパクで、生体膜の重要な成分であるコレステロールに強く結合することによって溶血を引き起こす。また、強い抗原性をもつことからS. pyogenesに感染すると、抗ストレプトリジンO抗体が産生されるので、溶血レンサ球菌感染症の血清学的診断に利用されている。一方、SLSは酸性アミノ酸とオキシアミノ酸を多量に含む30残基程度のペプチドで、細菌細胞の膜構成成分と考えられており、通常培養条

## 目　次

劇症型A群レンサ球菌感染症 …… 2
夢の「校友カード」発行準備始まる …… 6
山本純子先生を偲んで …… 7
お知らせ …… 8
卒後教育講座のご案内 …… 9
研究室だより …… 10
桜の木の下で（支部だより） …… 17
薬学部校友会（桜薬会）が財政ピンチです …… 19
会費納入報告 …… 19

【表紙写真】
撮　影：長谷川　稔

件では菌体外に放出されず、動物血清などを添加するとこれに結合して培養液中に放出される。

また、発赤毒素 erythrogenic toxin、または発熱毒素pyrogenic toxin / Streptococcal pyrogenic exotoxin (SPE)、ないし、発見者であるシカゴの臨床医Dick夫妻の名前を採ってDick 毒素とも呼ばれる耐熱性のタンパク性外毒素を産生し、いわゆる猩紅熱 (scarlet fever) に特有な紅斑を皮膚に起こす。この毒素にはA、B、Cの3種が知られており，これらはいずれもスーパー抗原活性をもつことが知られている。スーパー抗原は通常の抗原と異なり、マクロファージなどの抗原提示細胞表面のクラスⅡMHC分子の$\beta$鎖や、T細胞の抗原を認識するT細胞レセプター(TCR) の$\beta$鎖に直接結合してT細胞を活性化する。したがって、SPE A～Cが大量に放出されるとT細胞の過剰活性化と免疫系を調節するサイトカインの過剰産生を引き起こし、宿主（ヒト）の免疫ネットワークを破綻させる。

さらにS. pyogenesは、プラスミノーゲンをプラスミンに変えてフィブリンを融解して菌の拡散を助けるストレプトキナーゼや、結合組織の主要成分であるヒアルロン酸を分解して皮下組織への菌の拡散を助けるヒアルロニダーゼ、DNA分解酵素で膿や壊死組織を融解するストレプトドルナーゼ、あるいはプロテイナーゼといった様々な酵素を産生する。

一方、細胞表層にはM－タンパクやT－タンパクと呼ばれる膜タンパクがあり、これらタンパクの抗原性の相違からS. pyogenesは80以上の血清型に分類されている。M－タンパクは後述するようにS. pyogenesの菌力ないしは毒力を規定する因子 (virulence factor) の１つと考えられている。

## 臨床症状と診断基準

劇症型Ａ群レンサ球菌感染症は壮年および新生児期に多く、一般的な咽頭炎などのＡ群レンサ球菌感染症が学童期の疾患であることと対照的である。多くの場合基礎疾患はなく、集団発生もまれである。症状としては突然の強い痛みが特徴であり、圧痛や他覚所見に先立つ。発熱は最も多い初期症状であるが、ショック時の時は低体温になる。20%に悪寒、筋痛、吐気、嘔吐、下痢などのインフルエンザ様症状を呈することがある。80％に軟部組織症状すなわち局所の腫脹と発赤が出現し、次第に小水疱、水疱になり青みがかってくる。壊死性菌膜炎は軟部症状としては最も多く、下肢に好発し、循環不全と同時発症し、腫脹、疼痛で始まり急速に出血性となり、

**表１　劇症型Ａ群レンサ球菌感染症（STSS）診断基準**

**第Ⅰ項：Ａ群レンサ球菌の検出**

Ａ．通常無菌部（血液、脳脊髄液、腹水、生検標本および手術創など）から分離検出

Ｂ．正常でも菌の生息する部（咽頭、痰、膣、皮膚表面など）から分離検出

**第Ⅱ項：臨床所見**

Ａ．血圧低下．成人では収縮期圧が90 mmHg 以下．小児では各年齢の正規分布で下側確率5%以下の血圧低下

Ｂ．以下の２項目以上に及ぶ多臓器不全

1．腎不全．成人では血中クレアチニン値が2 mg/dL 以上，または各年齢の正常上限値よりも２倍以上の増加．腎不全の既往がある場合は従来値の２倍以上の増加

2．血液凝固障害．血小板が10万/mm³以下に低下，または播腫性血管内凝固症 (DIC) の徴候として凝固時間の延長，フィブリノーゲン量の減少およびフィブリン分解産物(FDP)の増加

3．肝障害．SGOT, SGTPまたは総ビリルビン値が各年齢の正常上限よりも２倍以上に増加．肝障害の既往がある場合は従来の２倍以上の増加

4．急性呼吸窮迫症候群 (ARDS)．急激に発症するびまん性肺浸潤および低酸素血症を呈するARDS．ただし心不全，または急激に発症した全身性の浮腫，もしくは低アルブミン血症に伴う胸水または腹水がないこと

5．落屑を伴う全身性紅斑性皮膚発疹

6．軟部組織壊死．菌膜炎，筋炎および壊疽を含む

Ⅰ項ＡとⅡ項ＡおよびＢが満たされるか，あるいはⅠ項ＢとⅡ項ＡおよびＢが認められ，かつ他の疾病が否定されればSTSSと診断される。

水疱を形成し、数時間で壊死が進行する。腎不全、さらに多臓器不全、敗血症に陥り、早期に適切な治療を施さないと急速に死の転帰を採る。死亡率は、米国の報告では30%、わが国では37.5%と極めて高い。昏睡やせん妄などの神経症状を伴いやすいことも知られている。1993年、米国防疫センター（CDC）が中心となって診断基準が提案されている（表1）。日本の厚生省研究班による診断基準案も米国のそれとほぼ同様であるが、診断基準に神経症状が加えてある。

**発症機序**

劇症型A群レンサ球菌感染症の発症機序は解明されていない。わが国および英国での患者から分離される菌の血清型別をみると前述のT－タンパク、M－タンパクに由来するT型、M型がT1, M1；T3, M3；T28, M28などの特定の型に限定される傾向を示すものの、とくにあらたな菌型はみられない。また、菌が産生する発赤毒素（SPE）との関係をみても患者から分離された72株中、BとCを産生する菌、AまたはBのみを産生する菌、AとBを産生する菌はいずれも15～17株とほぼ同じ割合で検出されており、その他Cのみ、AとC、AとBとCのいずれも産生する株もみられる。したがって、劇症型A群レンサ球菌感染症の発症とT型M型および発赤毒素との間に関連性は見いだされていない。ペニシリンなどの抗菌薬が著効を示すため臨床上問題になることは少ないが、上記血清型を含めたA群レンサ球菌を起因菌とする感染症は高頻度に発生している。すなわち、どこにでもいるありふれた病原菌といえるわけで、これらと血清型別や毒素産生能を含めて同じ菌株が突如として死亡率30%以上の恐ろしい疾患を引き起こすのである。集団発生はまれであることも考え併せると、発症には宿主側の因子が重要であることが示唆される。

先に触れたA群レンサ球菌の菌体表層物質であるM－タンパクは、粘膜への付着因子として働き、粘膜表層に菌を定着させ、好中球などの食細胞に抵抗して感染を成立させる。抗M－タンパク抗体は感染防御抗体（オプソニン抗体）として働き食細胞の食菌作用を促すことが知られている。したがって、このM－タンパクに対する抗体をもたない宿主の粘膜あるいは皮膚にA群レンサ球菌がいったん侵入すると、菌の分泌するストレプトキナーゼやヒアルロニダーゼなどの作用と相まって、容易に組織に浸潤し、菌血症を起こす可能性がある。また、その株がSPE A～Cを産生し、宿主がそれに対する特異抗体を欠いている場合には、このスーパー抗原の働きによって宿主の免疫機能が破綻する結果、A群レンサ球菌が多量に増殖する。また、SPE AおよびBはヒト単球から、腫瘍壊死因子と呼ばれるサイトカインTNF $\alpha$ を誘導することが知られており、このTNF $\alpha$ は、発熱、ショック、組織障害を起こす。さらに菌が多量に増殖すると菌体成分およびSLOなどの菌体外産物の細胞毒作用により急激な軟部組織壊死や多臓器不全、菌血症と敗血症ショックをもたらすことが想定される。

**治　療**

治療は抗菌薬や $\gamma$ グロブリン製剤などの投与による薬物療法、迅速な外科的処置、および抗ショック療法や血液透析、呼吸管理などの支持療法に分けられる。いずれにしても突然発症し、進行が早いので早期の診断と治療を必要とすることは言うまでもないが、支持療法と時機を逸しない外科的処置デブリードマン（挫滅壊死組織除去）が大切であるとされている。

A群レンサ球菌は、同じグラム陽性球菌である黄色ブドウ球菌と違い、耐性菌の検出頻度は非常に少なく、ペニシリン系抗生物質に極めて感受性である。したがって抗菌剤としてはペニシリン系薬が第一選択薬となる。一方、それにも拘わらずペニシリン系抗生物質だけでは治療成績が悪いという報告がある。その理由として、病巣でのA群レンサ球菌の菌量の問題があると思われる。一般にペニシリン系薬あるいは $\beta$ －ラクタム剤は増殖期の菌に対して効果的である。劇症型A群レンサ球菌感染症では病巣に極めて多量の菌が存在するために菌は静止期に入っており、ペニシリン系薬の効果が減弱することが考えられる。また、壊死性菌膜炎や菌炎では、局所の

血行障害により抗菌薬の十分な濃度が得られないことが考えられる。

最近、本症の治療に、タンパク合成阻害を一次作用点とするリンコマイシン系のクリンダマイシンが推奨され、効果を挙げている。クリンダマイシンが有効である理由として、細胞内への移行がよいこと、菌の発育の時期に関係なく抗菌力を発揮すること、A群レンサ球菌のM－タンパク質の合成を抑制して好中球による貪食作用を促進すること、菌体細胞壁の合成に関与するペニシリン結合タンパク(PBP)産生を抑制すること、ペニシリンなどのβ－ラクタム系薬剤よりpostantibiotic effect（薬剤の血中濃度が有効濃度以下に下がってもある期間菌の増殖を抑制する効果）が長いこと、リポ多糖(LPS)類で誘導される単球のTNF産生を抑制すること、などが挙げられている。

実際の抗菌薬の選択にあたって、推奨される抗菌薬および投与スケジュールが決定されているわけではない。しかし、クリンダマイシンの有効性、ペニシリン系抗菌薬の低いMIC値を考慮すると、劇症型A群レンサ球菌感染症の初期治療としては、それぞれ一次作用点の異なる、ペニシリン系抗菌薬とクリンダマイシンの併用が望ましいと考えられる。また、本症の疑いのある敗血症の初期治療では、黄色ブドウ球菌、グラム陰性桿菌、嫌気性菌など疑われる起因菌によってペニシリン系抗菌薬の代わりに広域スペクトラムをもつ適切な抗菌薬を選択し、クリンダマイシンと併用することが必要となる。壊死性菌膜炎が起きている場合には、他の菌との混合感染が高率に起こるので、第三世代のセファロスポリン系薬を併用する。

抗菌薬以外の薬物治療で、現時点においてもっとも有効なのはγ－グロブリンの静脈内注射であろう。劇症型A群レンサ球菌感染症患者では発症時に発赤毒（SPE）に対する抗体価、特に中和抗体価が低いが、γ－グロブリン中にはSPEに対する中和抗体が含まれていることが報告されている。また、静脈用γ－グロブリン中にはM1型のM－タンパクに対するオプソニン活性を有する抗体が存在し、実際にγ－グロブリン投与を受けた劇症型A群レンサ球菌感染症患者の抗Mタンパク抗体価が、投与後に有意に上昇したという報告もある。臨床的にもγ－グロブリン投与は効果的であったとする報告が多い。しかし、実際的な投与量、投与期間に関しては、まだ推奨される方法は確立されていない。文献的には、0.4g/kg×1回、12g×1回、150mg/kg/日×5日、1g/kg（初日）＋0.5g/kg（2日目）、2g/kg/日×2日などとなっている。これらの投与量がどのようにして決められたかは明らかではないが、投与量、投与期間ともかなりばらつきがあり、本症が成人に多い疾患であることを考えると、これらの中には投与量が大変な量となり副作用、経費とも無視できなくなるものもあると思われる。早急に有効かつ最小限の投与量の決定が望まれる。

発症時にはショックに対する治療も大切である。集中治療室に収容し、循環動態を中心とした厳重な管理下におき、昇圧剤投与、輸液を行う。腎不全は必発であり、血液透析を要する。壊死に陥った軟部組織は菌の生息部位であり、可及的広範囲にデブリードマンを行う。ショックから離脱し、壊死に陥った軟部組織を除去することが救命につながるとされている。

A群レンサ球菌を起因菌とする猩紅熱は、かってわが国で年間1万人前後の患者の報告があり、法定伝染病（昨年4月から法改正により死語となってしまった）に指定されていたが、繰り返し述べてきたようにペニシリン系抗生物質が著効を示すこと、および耐性菌の出現がほとんどないことから、1970年代後半から激減し、ここ数年間の猩紅熱の年間届け出患者数は、全国でも数人を数えるのみである。したがって、近年わが国ではA群レンサ球菌感染症、とくに上気道感染症は、かなりの頻度で発生しているにもかかわらず、咽頭炎、扁桃炎、皮膚化膿症など、せいぜい、かぜ症状を起こす程度の学童期の疾患とされ、臨床的にはあまり見向きされなくなったきらいがある。劇症型A群レンサ球菌感染症はまさにその油断をついて出現した感がある。抗生物質が“魔弾の射手”として登場して50年、一方的な人類の勝利に終わるかに見えた病原微生物との戦いは、

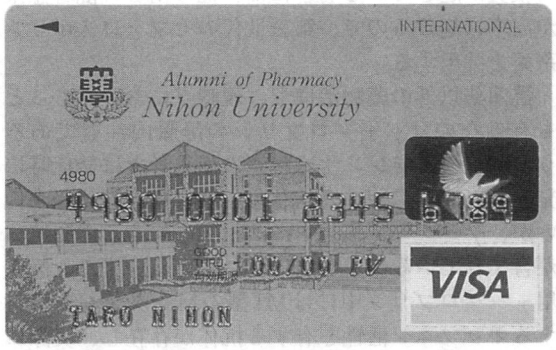
病原微生物の長い（と言っても数十億年に及ぶ原核生物の歴史からすると50年は、ほんの瞬きをするほどの時間でしかない。）不断の努力？によって、微生物自身が変化して獲得した薬剤耐性化と、宿主の免疫機能を巧みにかわす術を身につけた病原微生物の出現によって、予断を許さなくなってきている。

確かに劇症型A群レンサ球菌感染症の症例数は決して多くはない。本症のわが国での患者第1例目は1992年、健常な千葉の44歳の男性で、上気道感染症状や下痢が出現した直後、両下肢に壊死性菌膜炎・菌炎を生じたためデブリードマン（両側下肢の切断）、ペニシリン投与などで対処したが、急速に多臓器不全が進行して死亡した。冒頭に記したように1993年から1994年にかけて英国および日本であいついで本症の報告がなされた。予測はできなかったのだろうか。この年、およびその前年にはA群レンサ球菌による上気道感染症が流行していることが判っており、一部の医師は警鐘を発していたのである。この種の警鐘は、わが国においては何事かが起こってしまってから関心を持たれるのが普通で、何事かが起こる前には無視される。どうも劇症型A群レンサ球菌感染症の報告の増加は、A群レンサ球菌による上気道感染症の流行にやや遅れる傾向があるように思われる。一昨年あたりから今年にかけて、熊本、秋田、高知、茨城、福岡と全国的にA群レンサ球菌による集団感染例の報告があいついでいる。あなたの周りに扁桃腺を腫らした小学生はいないだろうか。そして、あなたは抗M－タンパク抗体をもっているだろうか。

（昭和51年卒）

# 夢の「校友カード」発行準備始まる

本部校友会に14学部校友会・都道府県支部・職域支部の代表が集まり日本大学校友カード委員会が設置されました。これまで薬学部（写真）・医学部・商学部校友会が独自に校友カードの発行をして参りましたがこれを統一して日本大学卒業生としてのＩＤカードにしようとの考えで委員会が設置されました。このカードの基本はＶＩＳＡ・ＪＣＢなどのクレジットカードです。通常のクレジットカードに校友会独自の付加価値を付けて校友としての連帯感を持てるカードを作ろうと考えての行動です。薬学部校友会事務局で考えた付加価値を少し並べてみましょう。　大学が交付する卒業証明書等の交付は出身学部でしか受けることが出来ません。しかしカードで本人証明が出来れば、時間が掛かるがすべての学部・高校で証明交付が可能であるし、そこの図書館も自由に利用できるのではないでしょうか。また大学の福祉施設も利用させて頂けるのではないでしょうか。学外利用は校友の協力が必要です。校友の共存共栄が出来るアイデアが必要です。ホテル・旅館・レストラン・食堂での消費税を内税にしたり、飲み物のサービスなど、大勢の校友が利用すれば校友経営者と利益を分かち合えるのではないでしょうか。サービスの提供、アイデアを事務局までお知らせ下さい。



# 山本純子先生を偲んで

薬品分析学研究室 教授　椛澤　洋三

去る平成11年10月20日、山本純子先生がお亡くなりになりました。慎んでお知らせ致します。弔報を受けたのは10月23日の夕刻でした。ご本人のご意志によりすでにお身内によるご葬儀が執り行われた後でした。特に苦痛も無く老衰による安らかなご最後だったそうです。満82才になられていました。ご冥福をお祈り申し上げます。

お伺いした話しでは、共立女子薬学専門学校ご卒業後、東大医学部薬学科薬品分析学教室石館守三先生の下で元素分析のお仕事に携わられて居られたそうですが、昭和27年日大工学部に薬学科が設置され、これに伴い翌年から講師として分析学教室に赴任されました。分析学教室では早速2年次生の講義と実習があり準備にご苦労されたとのことでした。当時教室には益子安助教授、細谷昇助手、佐藤幸二助手の皆さんが居られご一緒に開講に向けてご尽力頂いたのだそうです。第1期生が専門部に移校した年から30年の永きに渡ってご指導を頂いた最古参の恩師でした。教室では2年次の薬品分析、3年次の有機分析、4年次の薬品試験法と各々の実習が行われ、毎日のように学生の提出したレポートを検閲されていました。女性の教員が先生お一人であったこともあり、学生の立ち居振る舞いについて、特に女子の身だしなみに関しては大変厳しい躾を頂きました。昨今の学生をご覧になったらさぞ驚かれるのではないでしょうか。また先生は、薬学科設置以来元素分析室を担当され、オペレーターを指導し薬学科、工業化学科を初め多くの依頼分析に応えられていました。当時の研究報告には元素分析値は大変重要な情報で学会発表時には大忙しのご様子でした。教室にはその後、昭和30年に井上周吉教授が、そして32年には杉井篤助教授が赴任されています。山本先生には鎌倉彫りの教室に通われていた頃がありました。2点ほど作品を拝見した事がありましたが見事な出来栄えに感服した記憶があります。あまり多くないご趣味の1つでした。何でもお身体（健康）に合っているからと、通勤にも楽ではなかったでしょうが“逗子の先生”と言われるほど湘南地方がお好きで、退職後も茅ヶ崎市南湖の「茅ヶ崎太陽の郷」でお一人、以前から飼っていた小鳥をルームメイトにして過ごされていました。晩年には膝の不調と乳癌手術の後遺症とかで腕のむくみを訴えられていましたが、ふとしたことで室内で転倒されてから、気力も体力もにわかに衰えてしまわれたそうです。「楽しみにしていますから」と、毎年研究室の同窓会にご出席頂いておりましたが、昨年はご案内に連絡が無く、問い合わせましたところ「体調がすぐれないので・・・」とのお返事が最後になりました。

お墓は故郷の神奈川県愛甲郡清川村の宮ヶ瀬霊園という、宮ヶ瀬ダムを見下ろす所で、姪御さんの行平祐子さまのお話によれば、先生の思い出の地だそうです。11月20日の納骨だったそうです。ダムの静かな湖面に遅い紅葉が美しく映る山あいの静かな霊園でした。代表でお参りしてきました。特に先生から伺ったことはありませんでしたが、ダム建設に当たって湖底に埋った部落があったそうです。その関係の霊園ということでした。山本先生にも古里への想いが重なっておられたことと偲ばれました。

生前のご恩に感謝し、重ねてご冥福をお祈り申しあげます。

**山本純子先生ご略歴**

| | |
|---|---|
| 大正6年6月11日 | ご誕生 |
| 昭和14年3月 | 共立女子薬学専門学校卒業 |
| 19年9月 | 東京大学医学部薬学科<br>薬品分析学教室　就職 |
| 28年4月 | 日本大学工学部薬学科講師 |
| 47年5月 | 日本大学理工学部薬学科<br>助教授 |
| 53年8月 | ヨーロッパ薬学事情視察 |
| 57年6月 | 定年・非常勤講師 |
| 58年3月 | 同　退職 |
| 平成11年10月20日 | ご逝去　満82才 |

# お知らせ

## ❀お慶び❀

昭和31年工学部薬学科（1期生）の大神信勝氏が永年の薬事衛生に対する功労により、平成11年秋、藍綬褒章を受賞されました。同氏は福岡県飯塚市でライフ薬局大神を経営されるかたわら県薬剤師会・県学校薬剤師会の要職で活躍されました。

校友一同心よりお慶び申し上げます。

## ○ 第25回薬品分析学研究室同窓会のお知らせ

薬品分析学研究室同窓会を下記の通り開催致します。皆様お誘い合わせの上、奮って御参加・御協力くださいますようお願い申し上げます。

記

**日　時：平成12年6月4日（日）**
午後1時～3時頃
**場　所：御茶ノ水「ホテル聚楽」**
**問合せ先：**薬品分析学研究室内・同窓会事務局
TEL＆FAX：047-465-6137

## ○ 日本大学薬学部校友会平成12年度通常総会開催案内

日本大学薬学部校友会会則11条による通常総会を下記により開催いたします。

総会終了後、恒例の懇親会を開きます。お忙しいとは存じますが、万障お繰り合わせいただき、多数のご参加をお待ちしています。

記

**日　時：平成12年6月24日（土）**
総　会：14：00～15：00
懇親会：15：00～17：00
**場　所：日本大学薬学部**
**懇親会会費：**3,000円

## ○ 第12回桜薬祭のご案内母校を訪ねる日

第12回桜薬祭（薬学部学園祭）が平成12年11月4日(土)・11月5日(日)に薬学部校舎で開催されます。

薬学部校友会では初日の11月4日を「校友の母校を訪ねる日」と定めて、当日は参加校友に昼食券(500円)を進呈しております。皆様のご来校をお待ちしております。

# 日本大学薬学卒後教育講座のご案内

◎ 第67回 日本大学薬学卒後教育講座
開催日時　平成12年5月11日（木）
18：00～20：00
テーマ　**性感染症の動向とその診断・治療**
講　師　日本大学医学部兼任講師
山崎　誠　氏

〔講演要旨〕

平成11年3月31日をもって昭和23年以来、51年間にわたって施行されてきた性病予防法が廃止され、代わって同年4月1日より感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律、いわゆる「感染症新法」が施行されました。その他、伝染病予防法、後天性免疫不全症候群の予防に関する法律等も廃止され、すべてこの新法に統合されました。

ここに至るまでに、1970年代後期には既に性病予防法に規定されている梅毒、淋疾、軟性下疳、鼠径リンパ肉芽腫症の、いわゆる「四大性病」の枠組みでは捕えることの出来ない、性的に感染する疾患が台頭し始め、非淋菌性尿道炎・子宮頸管炎、陰部単純疱疹（陰部ヘルペス）、尖圭コンジローマなど、当時特に法的規定の無い疾患が数の上でも増加の一途を辿り、反面、梅毒、淋病（淋菌性尿道・子宮頸管炎）などの届け出数は減少しておりました。しかしながら、1998年には梅毒、淋病ともに届け出数が1997年より増加するなど、変化の兆しが見られ、また非淋菌性尿道炎・子宮頸管炎の重要な起炎菌であり、昭和61年より検体検査が保険収載されたクラミジア・トラコマチスについては、過去10年間の動向を見ると一時減少の時期はあったものの、現在性器クラミジア感染症として年毎に増加の傾向にあります。

わが国のみならず世界的な重要課題であります性感染症（STD）のうち、淋菌感染症、クラミジア感染症、単純ヘルペスウイルス感染症、梅毒トレポネーマ感染症など代表的な疾患について今日の動向、診断法の進歩、治療薬剤などを中心に述べさせていただきたいと思います。特に、最近ペニシリン耐性淋菌に代り増加しております合成抗菌剤(ニューキノロン)耐性淋菌についても、その問題点、治療指針、クラミジア混合感染例での対処法などを具体的に述べさせていただきます。

以　上

◎ 第68回 日本大学薬学卒後教育講座
開催日時　平成12年7月13日（木）
18：00～20：00

◎ 第69回 日本大学薬学卒後教育講座
開催日時　平成12年9月14日（木）
18：00～20：00

会　　場：日本大学会館
［住所］千代田区九段南4-8-24
［最寄り駅］市ヶ谷駅
（ＪＲ中央線　営団有楽町線・南北線　都営新宿線）
受講申込方法：当日会場受付にて申込
（予約不要）
受付開始時間：17：30～
受講資格：特になし（出身校等一切不問）
受講料：1,000円
（当日会場受付にて申し受け）
受講者には講義資料・受講証を差し上げます
問い合わせ先：日本大学薬学部庶務課
〒274-8555
千葉県船橋市習志野台7-7-1
TEL　047－465－2111
単位数：1単位
（日本薬剤師研修センター研修認定薬剤師制度）

# 研究室だより

## 薬品分析学研究室 (3号館3階331)

この冬は暖冬とは言われるものの朝・夕の冷え込みはやはり冬そのもの、厳しい寒さが身にしみます。

皆様にはお変わりなくご活躍のこととお喜び申し上げます。研究室も桧澤先生をはじめ一同変わりなく元気に頑張っております。

昨年度の卒研生16名は全員卒業し、現在は各方面でご活躍のことと思います。本年度は15名の卒研生が配属されました。夏には石和温泉へ卒研旅行に行き、観光地めぐりや夜には花火・宴会など、皆で楽しく親睦を深めてまいりました。現在は卒業研究も終了し、最後の関門である総合講義試験及び国家試験に向けて猛勉強中です。全員合格し、晴れて薬剤師になれるよう研究室員一同応援しております。彼らの卒業後の進路もほぼ決まってきており、これも会員の皆様の御尽力のお陰と感謝致しております。

来年度は15名の新卒研生と、本年度の卒研生の中から1名大学院生（博士前期課程）として迎える予定です。桧澤先生を中心として力を合わせ、来年度も活気溢れる研究室作りに励んで参りたいと思っておりますので、本年度同様、御指導、御鞭撻のほど宜しくお願い致します。

毎年恒例の研究室同窓会が昨年5月22日（土）に行われました。毎年御出席頂いている方々や、久々にお会いできた懐かしい方々など多数御参加頂き、盛会のうちに幕を閉じました。次回は平成12年6月4日（日）13時から例年通り、御茶ノ水の「ホテル聚楽」で開催される予定です。毎年土曜日の開催となっておりましたが、お仕事の都合で出席できないという御意見を多数頂いたため、次回より土曜日・日曜日交互の開催となりました。御多忙とは存じますが、万障お繰り合わせの上御参加頂けることを願っております。

また、長年薬品分析学研究室において教鞭をとられておりました山本純子先生が去る平成11年10月20日に老衰のため82歳で永眠されました。心より御冥福をお祈り致します。

最後になりましたが、皆様の益々の御発展、御健勝をお祈り申し上げます。（岡田　記）

## 薬化学研究室 (3号館3階332)

研究室では、長谷川教授をはじめ宮澤助手、古城副手および私ともどもかわりなく教育、研究に励んでいます。

恒例の7月末の卒業研究旅行は、諸事情により9月の横浜市内バス観光になりました。横浜は卒研生のなかには行ったことがある学生がいましたが、バスで巡ると雰囲気が変わりとても楽しめたそうです。現在、卒研生は研究や勉学にはげんでおり、薬剤師国家試験に全員合格して欲しいと思います。また、来年度の卒業研究生が昨年12月に仮着手となり15名（男子6名、女子9名）が配属されました。昨年と同様に就職難が予想されますので、皆様の御協力をお願いいたします。

さて、私事でございますが、日本大学海外派遣研究員としての米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）での一年間の研究生活を終え、昨年9月に帰国しました。UCLAで所属したのはDepartment of Chemistry and Biochemistryで、この学部はクラウンエーテルの研究でノーベル賞を受賞したD. J. Cram教授で有名です。研究を行ったのはC. S. Foote教授の研究室で、構成は教授、秘書のほか、ポスドク（博士研究者）が3人、院生が4人、4年生が2人で、人種もアメリカ人の他にイタリア人、スペイン人、中国人と多彩でした。研究は

活性酸素の一種である一重項酸素に関連したもので、私も一重項酸素とベンゾフラザン類との反応を担当しました。UCLAのキャンパスは、ロマネスク様式のロイスホール、ロダンなどの作品が並ぶ野外彫刻スペースのスカルプチャーガーデン、球技場のドレイクスタジアムなど施設が充実しており、実験室も部屋の広さ、天井の高さなど余裕がありのびのびと実験ができました。また、週3回の講演、院生のコロキウム、研究室のゼミと大変有意義でした。この経験を今後の研究に活かしたいと思います。留守中は研究室のスタッフ、薬学部の皆さまに御迷惑をおかけしましたが有意義な一年間を過ごさせて頂き感謝しております。

最後になりましたが、桜薬会会員の皆様の益々の御健勝と一層の御活躍をお祈り申し上げます。

（高畠　記）

## 化学研究室

（3号館3階334）

初めに研究室の近況をお知らせしますと、徳竹教授をはじめ、香取講師、本橋それぞれ元気に研究、教育に励んでいます。鳥山助手は平成11年度日本大学海外派遣研究員として、昨年8月25日に米国マサチューセッツ工科大学（MIT）へ海外出張しました。大いなる研究成果を挙げられることと一同期待しています。なお、帰国は今年の8月末になるので、手紙やメールを送って是非励ましてあげて下さい。

住所　Masaharu Toriyama
1530 Beacon St.#104
Brookline, MA02446, U.S.A.

Tel&Fax 001-1-617-566-6723
E-mail toriyama@tkg.att.ne.jp

大学　c/o Professor Christopher C.Cummins
Department of Chemistry
Massachusetts Institute of Technology
Cambridge, Massachusetts 02139, U.S.A.

本年度の卒研生は16名で、昨年の9月には日帰りで横浜へ研修旅行に行き、中華街で美味しい中華料理（？）を食べ、炎天下に中華街、山下公園を散策するなどして教員と学生の親睦を深めてきました。卒業研究を終えた現在は、卒業試験、国家試験に向けて猛勉強中です。就職状況は経済情勢を反映し益々厳しくなっていますが、桜薬会諸先輩方のお力添えを何とぞよろしくお願い申し上げます。

また、来年度の卒研生12名が仮配属され、研究室員一同4月からの新年度へ向けて新たな気持ちで教育、研究に励む所存です。末筆ながら皆様方のご健康と益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

（本橋　記）

## 薬品化学研究室

（3号館3階335）

桜薬会会員の皆様方におかれましては、各方面で御活躍のこととお慶び申し上げます。

研究室では藤本教授をはじめ、内倉、三宅両講師、牧野さん、会社から派遣されている大越さん、そして助手・内山のスタッフで元気よく研究・教育に勤しんでおります。三宅講師は日本大学海外派遣研究員として平成10年9月1日からアメリカのピッツバーグ大学へ1年間、留学されましたが、無事に帰国

されたことをここに御報告します。

本年度、研究室には15名（男子6名、女子9名）が卒研生として配属され、夏には南房総へ一泊二日の研修旅行に行きお互いの親睦を深めました。そして卒業研究も終了し、厳しい就職活動が続く中、卒業試験及び薬剤師国家試験全員合格に向けて奮闘している毎日です。また、4月からは社会人としてスタートする修士課程2年の原君（ノバルティス）は、その研究成果を修士論文にまとめることができ、修士論文発表会での発表も無事に済ませました。大学院生には新たに5名（男子3名、女子2名）が加わり、和気藹々とした中にも、お互いライバル意識をもちながら、毎日夜遅くまで精力的に研究を行っております。その研究成果の一部は、3月末に岐阜で行われる日本薬学会第120年会において発表される予定です。

来年度は新たに、2人の大学院生（男子・女子各1名）と15人の新4年生（男子6名、女子9名）が配属される予定です。校友諸兄姉におかれましては今後とも御指導、御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、会員の皆様の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。（内山　記）

## 薬剤学研究室

（3号館4階341）

桜薬会会員の皆様には多方面で益々御活躍のこととお慶び申し上げます。

今年度の薬剤学研究室の近況についてお知らせ致します。花野教授は、日本大学国際産業技術・ビジネス育成センター（NUBIC）副センター長として以前にも増してお忙しい日々を送られています。NUBICとは簡単に説明しますと大学の研究室に眠っていた技術の中から実用性のあるものを発掘し、研究者に代わって特許を取得する一方で、そうした技術を製品開発などに活用できそうな企業を探し出してライセンス契約を結び、企業からのロイヤルティー収入を大学や研究者個人などに配分する機能を備えた技術移転機関（TLO、Techonology Licensing Organization）のことです。現在、日本大学を含め全国で10組織がTLOの承認を受けているそうです。花野先生をはじめ我々スタッフ一同、当研究室の基礎研究の成果が、産業界に橋渡しできる日もそう遠くはないものと信じ日々頑張っております。伴野先生におきましては、平成11年10月から助教授に昇格されました。今後の益々の御活躍を期待しているところです。後藤先生もお元気で、研究と教育に全力を挙げて取り組んでおります。私（鈴木）と大学院1年生である荒井君は、3月に行われる日本薬学会第120年会（岐阜）での発表の準備に向けて日夜研究に励んでいます。

さて本年度の卒業研究生は15名（男性8名、女性7名）配属になり、昨年の7月末には、熱海の温泉に1泊2日の研修旅行に行き、海水浴、ビーチバレー、伊豆半島巡りなどをしてきました。海辺での花火の後、夜の宴会ではハンカチ落しなど懐かしい遊びも飛び出し、学生と教員との距離が少し近くなったような気がしました。

この写真は、ホテル前での一枚です。

卒研生は9月から本格的な卒業研究が始まり、研究の面白さや楽しさ、または厳しさを短い期間でしたが、体験することができたと思います。11月末には卒業論文を提出し、息をつく暇もなく、卒業試験、国家試験の合格目指して猛勉強中です。この時期は己との闘いです。集中力・精神力を鍛錬する絶好のチャンス（？）です。薬剤師として必要な知識及び技能は当然のことながら固定されたものではなく、

日進月歩で変化しており、21世紀を迎えるにあたり、薬剤師の活躍する分野は今以上に広範囲にわたっていくものと推察されます。4月に皆さんが肌と心で暖かい季節を感じるとることができることを期待しております。

また、4月からは新たに1名の大学院生が加わることになっており、研究室もさらに活気が満ち、研究体制の充実も図られてくるものと思われます。

今年も就職活動が春を待たずに始まりますが、状況は厳しく深刻な不況の影響は否めません。桜薬会の諸先輩方のお力添えを宜しくお願い致します。

最後になりましたが、薬剤学研究室教授花野先生には平成12年3月末日をもって定年退職されることになりました。先生には平成3年4月から9年間にわたり、薬剤学研究室、臨床薬剤学研究室で教育研究にご尽力なされ、この間平成6年4月から3年間薬学部長として薬学部の発展に、その後、すでに述べましたがNUBIC副センター長として、日本大学の発展に多大の貢献をされました。つきましては、同窓会を夏頃までには開催したいと思っております。是非ご参加くださいますよう宜しくお願い申し上げます。　（鈴木　記）

## 薬品物理化学研究室

（3号館4階342）

厳しい寒さが続いておりますが、桜薬会の皆様におかれましては各方面で益々ご活躍のこととお慶び申し上げます。

初めに当研究室の近況をお知らせいたします。佐藤孝俊先生が、平成11年3月をもって定年を迎えられました。先生は昭和29年にご着任以来40年以上の永きにわたり、薬学のために御尽力されてきました。佐藤先生、長年にわたる御指導本当にありがとうございました。

そして、4月からは小川尚武助教授が教授、10月からは齋藤好廣専任講師が助教授に昇格され、教育・研究にお忙しい毎日を送っておられます。田口助手は、今年3月に行われる日本薬学会（岐阜）での発表に向け研究に励んでおられます。また、私事

ではございますが、昨年4月より、橋崎要（平成11年3月東京理科大学理工学研究科博士前期課程修了）が助手として勤務しております。

大学院生および学部生の近況ですが、修士課程二年の加藤木陽子さんは、2月16日に無事修論審査会を終え、春からは（株）資生堂への就職が決まっています。また、修士課程一年の三浦禎大君も日夜研究に励んでいます。平成11年度の卒研生は15名（男性6名、女性9名）が配属となり、7月29日、30日にかけて河口湖に卒研旅行に行き、大変有意義に親睦を深めることができました。また、それぞれ充実した卒業研究を終え、現在は薬剤師国家試験に向けて勉強に忙しい日々を送っている様子です。2月9日には第3回目の総合講義試験も終わり、卒業が決定した学生もいますが、国家試験までは気を抜かないよう頑張って、全員そろって卒業できることを願うばかりです。また、本年度も就職活動は依然として厳しい状況にあります。引き続き校友の皆様の一層のお力添えがいただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、会員皆様の益々の御健勝と御多幸をお祈り申し上げるとともに御指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。　（橋崎　記）

## 臨床薬剤学研究室

（3号館4階345）

校友会の皆さん、また放射化学研究室・臨床薬剤学研究室卒業生の皆さんには、御元気にご活躍のことと御慶び申し上げます。臨床薬剤学研究室に衣更

えし、薬学部に移って12年3月末日で10年になります。この間医療薬学を標榜してきた我が薬学部の中での位置を確保しつつあるように思われます。しかし、大学院における医療薬学コースの設置を平成13年度に予定して、すすめていることを考えると今後更に努力を続ける必要を感じています。

平成11年度末からの研究室の状況について報告します。研究室の教員の人事では、小山由美さんが助手として平成11年4月1日着任しました。同嬢は平成3年に日本大学薬学部を卒業し（卒論臨床薬剤学研究室）、同年3月筑波大学で博士（医学）のタイトルを取得したものです。若く、優秀な人材なのでこれから本学、本研究室の教育・研究に大いに貢献してくれることを期待しています。

卒論生は16名で15名が何とか卒業しました。進路は病院薬局勤務が7名、保険薬局勤務が3名、大学院進学1名その他4名です。しかし、この中には国家試験に再挑戦する人もいます。国家試験再挑戦者以外は全員就職を決めて現在活躍をはじめています。

平成12年度の卒論生は15名が予定されています。男性10名、女性5名です。男性の中には薬学の男性に比べて男らしい学生が多いので、成績ばかりでなく将来的にも楽しみにしています。なお、大学全体の比率から見ると我が研究室は男性がかなり多くなっています。

なお、同窓生の菅野圭介氏（昭和52年卒）が中心になって今年中に同窓会を予定しています。多くの同窓生の参加をお願いします。　（青木　記）

## 実験動物センター

（4号館1階411）

薬学部実験動物センターは、4号館1階にあり、これまで実験や実習に使用されるラット、マウス、モルモット、ウサギの飼育が行われてきました。管理・飼育に関する実務は、浅倉技手補が担当しております。

大学院薬学研究科設置などにより使用動物が増加し、施設が狭隘となったため、平成10年度に実験動物センターの増築が検討され、平成11年度に新実験動物センターの建設（増築）が認可されて同年6月より工事が着工されました。

増築部分は、地下1階、地上4階建てで、地下1階は排水処理槽メンテナンススペース、1階には中央洗浄室、管理室等があり、2階は通常のコンベンショナル動物よりも、やや清浄度の高いクリーン動物の飼育室及び実験室、3階は最も清浄度の高いSpecific Pathogen Free（SPF）動物の飼育室及び実験室となります。4階部分には機械室及び屋外機設置場があります。また、通常のコンベンショナル動物は、既存の施設部分で飼育することになる予定です。

新しい実験動物センターが稼働しますと、飼育可能動物数も、現在の3－4倍となり、年間を通じて一定の温度、湿度に保たれ、今までより良好な環境で動物飼育・および実験を行うことも可能となります。　（浅倉　記）

## アイソトープセンター

（4号館1階412）

薬学および関連領域の研究でラジオアイソトープを用いる際の共同利用研究施設として、科学技術庁の許可を受けて昭和63年に薬学部校舎4号館に設置されました。

この施設の放射線取扱主任者には薬品物理化学研究室の小川尚武教授と井熊が選任されており、安全管理は薬学部放射線障害防止委員会が担当しています。管理室には専任の技術職員が常駐しており，初代は33期生の塙剛央技手、平成5年より26期の井熊が，隣接する実験動物センターから配置替えになり現在に至っています。

今までに延べ約600名の実験者（教員、大学院生、学部4年生、研究生、研究員、技術職員）がこの施設を利用しておりますが、無事故で運営されております。また被ばく線量も放射線測定器の検出限界レベルです。しかし、ラジオアイソトープは取扱いを誤れば様々な意味で重大な事故となる危険な物質であることを認識し、その使用、保管さらに廃棄物の

処理等は厳格に行っています。なお、2001年4月に放射線障害防止法が大幅に改正される予定で、行政レベルでのその作業が最終段階になっています。

（井熊　記）

## 分析センター

（4号館2階421）

分析センターは薬学研究所の研究施設の一つで、学部内の大型分析機器を集中管理し、共同利用することにより、学内における教育、研究を支援し、設置機器を駆使した研究を行うことを目的としています。分析センター員は生化学研究室出身の目鳥幸一(25期)と木村由美子（10期）の２名が担当しています。

分析センターには現在、FT-NMR装置２台(400MHz, 500MHz)、高分解能GC-MS装置２台、四重極GC-MS装置、FT-IR、元素分析装置、アミノ酸分析計、プロテインシーケンサー、円二色性分散計、走査電子顕微鏡、透過電子顕微鏡 の12種の機器が設置されています。文部省の補助金を受けて、化学系、生物系の機器の充実が図られてきましたが、平成12年度には共焦点レーザー顕微鏡の申請が予定されています。

測定は機種により、依頼測定と研究者自身での測定の二通りの方法が取られています。ほとんどの機種がシステムにWindowsを使用し、目的の測定が短時間に簡易に出来るようになりました。卒業生各位におかれまして、ご利用されたい方は卒業研究室あるいは分析センターに直接ご相談ください。

FT-NMR装置
漏洩磁場を押さえたself shield型
500MHz FT-NMR装置

（木村　記）

## 薬事管理学研究室

（5号館3階535）

桜薬会会員の皆様にはご健勝にてお過ごしのこととお喜び申し上げます。

薬事管理学研究室では、保険薬局、薬剤師業務を巡る様々な社会問題をテーマにした研究に引き続き取り組んでいます。ご存じの方もおられることと思いますが、昨年秋に日本薬剤師会が調査結果を公表した「平成10年度疑義照会等状況調査」結果は、朝日新聞の１面に掲載されるなど、社会の大きな反響を呼びました。この疑義照会に関する研究は、中村健先生を中心として当研究室が昭和62年から取り組んでいるテーマの一つであり、平成10年度の調査についても当初の調査計画より当研究室が参画し、実際の集計・解析を受け持ちました。この結果によって、医薬分業の有用性が実証されただけでなく、「薬剤師」の役割を国民にアピールできたことは、大変喜ばしいことだと思います。

平成11年度の卒業研究生は、この疑義照会調査のデータ解析をさらに進め、医薬品と疑義内容との関連性をテーマとした卒業研究に取り組みました。卒業研究は年内にまとめ終えて、現在は国家試験に向けて猛勉強中です。

今後益々問われる医療における薬剤師の役割については、薬剤師一人一人が法制度や経済面を包含した問題意識を持つ必要があります。このような薬剤師や薬と社会との関わりを研究する学会として誕生した「日本社会薬学会」の第１回目の学術大会（第19年会）が、中村健先生を大会委員長として、今年10月、本学薬学部校舎にて開催されます。卒業生の皆様のご参加ご発表を募るとともに、この機会を利用して是非ご来校いただければ幸いでございます（日本社会薬学会第19年会に関する問合せ先：薬事

管理学研究室 TEL/FAX 047-465-7413)。

末筆ながら、皆様のご健康とご活躍をお祈りいたしております。　(亀井　記)

## 社会学研究室 (5号館4階544)

“家族”、“秩序”をその根底におきながら、乳幼児から高齢者までの人間の一生に巡ってくる、その時々の解決しなければならない課題・ヒントなどを解説していく「社会学概論」と“地球環境”を中心に、地球の形成から人類の誕生と発展まで、また、公害問題の歴史と今日的な環境問題、自然災害（地震）などに関して解説していく「環境地理学」を担当している。

薬学部では一般教育に属するが、前者では、薬剤師として人の生命・健康を預かる重要な職種に就こうとする学生のために、その前提となる薬剤師としての資質を養う人間教育を担い、特に、青年期の課題に関して、疾風怒濤の時代を乗り切るためのヒントなども学生と一緒に模索している。また後者では、人の歴史を人間を取り巻く外界としての環境と言う視点から捉え、薬剤師として必要な教養の部分を担っていると位置づけている。

薬剤師として社会に貢献できる人間教育は社会科学の教養の知識から生まれるものであると考え、今後も信念を持って授業を展開していく所存でいる。

(伊藤　記)

## ドイツ語研究室 (5号館4階547)

春光うららかな日々となりました。桜薬会会員の皆様にとりましてはますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

山崎良介先生

さて、もうじき期待に胸をふくらませた新入生たちを迎えます。彼らは今さら新しい言語の習得を目指してどこまでやれるかという疑問と、ドイツ語を通してドイツ語圏世界に触れてみたいという期待が、交錯していると思います。彼らには早い時期にドイツ語が使われている国に一度行かれることをお勧めします。

世界の先端をいくドイツの環境政策・ゴミの処理技術、オーストリアの音楽やツーリズム、スイスのアルプスの山々。いずれも世界の人々の興味を強く引き付けるものばかりです。ドイツ語という一つの言葉を通して、多様で内容豊富な世界が覗けます。

自分の暮らす環境とは違う世界に触れる。しかも若いうちに触れる。この種の体験をするのは大事なことだと思います。

そうした手引きをしてくれるのが、外国語学習の大きな役割の一つだと考えております。

(山崎　記)

## 心理学研究室 (5号館4階548)

会員の皆様お元気でいらっしゃいますか。ずっと以前に心理学研究室にも卒研生がいたことがありました。しかし、今は所属しなくなりまして、淋しくなったままです。講義は基礎心理学と医療心理学を担当しています。心理学は今日の日本でたいへんもてはやされていることもありまして、受講生は多数です。学生の関心はテレビの報道のような異常心理にあるようです。一時流行したココロジイなるテレビの感覚が現在の学生の感覚にマッチしていると言えるでしょう。

研究室での研究は、文献を読むことだけに集中しています。その内容は、教育心理学を教えていたことによる不登校・いじめといった教育に関わるものから、医療心理学に関係する、過食・拒食の摂食障害のことや、境界人格、自己愛人格、as-if人格、分裂病人格、解離性人格、依存性人格、強迫性人格、回避性人格といった様々な人格障害や性同一性障害、不安障害、睡眠障害といったものがあります。これらの文献研究を続けているところです。

(中里　記)

# 桜の木の下で（支部だより）

## 佐藤孝俊教授退任記念祝賀会

平成11年6月6日赤坂プリンスホテルにおいて、佐藤孝俊教授退任記念祝賀会が開催されました。祝賀会には日本大学名誉教授 村越善衛、桐沢誠、滝戸道夫、和井内徹の各先生、元日本大学教授（東京大学名誉教授）福田英臣先生、薬学部長小山隆先生を始めとして多数の大学関係者、学会関係者、ご友人、卒業生など総勢約230名のご出席をいただき盛大に挙行することができました。祝賀会は、本会の発起人を代表して薫会会長の静谷隆吉氏の挨拶に始まり、ご来賓の小山隆先生福田英臣先生のご祝辞をいただいた後、村越善衛先生による乾杯のご発声により歓談に入りました。引き続き、卒業生を代表して8期生渡辺正孝氏よりご挨拶をいただきました。会の半ばには中村泉美先生による謡曲と17期生安部敏子様による日本舞踊のご披露があり、祝賀会を大いに盛り上げていただきました。懐かしい顔ぶれとの再会で佐藤先生ご夫妻と出席者の方々との間でご歓談が弾み、会は終始なごやかな雰囲気で行われました。会も終わりに近づき4期生宮野正弘氏より記念品の贈呈、大学院生加藤木陽子さんと三浦禎大君からの花束贈呈の後、佐藤先生の謝辞、研究室を代表して小川より閉会の辞を述べ無事に閉会となりました。なお、佐藤先生からの退任記念誌と一輪ざしの記念品を出席者全員にお持ち帰りいただきました。このように多くの方々のご参加とご祝意をいただき、盛会裡に佐藤孝俊先生の退任記念祝賀会を挙行することができましたことをご報告いたします。佐藤先生の永年のご苦労とご恩に衷心より感謝するとともに益々のご発展とご多幸をお祈りいたします。

佐藤孝俊教授退任記念祝賀会発起人
（代）小川　尚武

## 第24期生卒業20周年同期会開催報告

大学を卒業し20年が経過しました。その間、各研究室などでは同窓会や同期会など行われていましたが、昭和54年卒業生が一堂に会しての同期会は開催されていませんでした。そこで、一つの区切りとして、平成11年11月14日、元日大理工学部8号館のそばのヒルトップホテルで卒業20周年同期会を開催しました。

今回は、大学校友会の名簿から昭和54年卒業生、昭和50年入学で55年卒業生の方々への案内に併せて各研究室でお世話になった先生方に御招待状を出させていただきました。

当日は、全国から同期生78名が集い、教職員では小山薬学部長を始め沢村先生、滝戸先生、宮尾先生、山内先生、青木先生及び北中先生に御出席を賜りました。

幹事が会場に到着した時、会場の入り口付近にはは、開会を待ちきれない面々が談笑しており、既に同期会が始まっていた観がしていました。歳月が人を変えるとはいうものの、20年振りに会ったその瞬間、脳裏には20年前の学生時代の相手がフラッシュバックしていたように感じました。

会は、故平島秀一君への黙祷、発起人の挨拶、小山学部長により大学の近況についての御報告、校友会代表として山内先生から校友会の現況について御報告のあと、宮崎から出席された田中俊一君の乾杯の挨拶で始まりました。2時間足らずのパーティーでしたが、そこここに話の輪ができ出席者の方々には楽しんでいただけたようでした。会場には、欠席者からのメッセージを掲示しましたが、是非次回は出席して話の輪に加わって頂きたいと思います。その後、全体の記念写真撮影、青森から当日上京された佐藤芳久君の閉会の挨拶の後、解散しましたが、参加者は名残を惜しんで2次会などに繰り出して行ったようでした。

最後に、同期会の開催に先立ち、お忙しい中各卒研から幹事としてお手伝いをいただきました方々に御礼申し上げます。　（文責　謝村錦芳）

## 校友会大阪支部新年互礼会の報告

平成12年1月19日（水）、「ホテル メトロ ザ・21」において、日本大学校友会大阪支部新年互礼会が開催されました。多くの出席者の中、薬学からも6名が参加しました。

久しぶりに日大校歌を斉唱した後、鏡開きを行い樽酒で乾杯し、懇談に入りました。薬学部のはじめての参加ということで、貴重な時間を割いていただき薬学部出席者全員が演台にあがり、自己紹介を行いました。出席者の皆様からあたたかい拍手を受け一同感激いたしました。また、他の学部の方から気さくに声をかけていただき、たくさんの方と名刺交換もおこない有意義なひとときを過ごしました。

薬学部大阪支部としての組織も十分に確定しておらず、活動も行っていませんが、薬学部校友会事務

24期生卒業20周年同期会

局の皆様のご協力をいただき、少しずつでも前進していきたいと考えております。　(23期　福島宣久)

## カッパ会が開かれました

澤村良二先生に教えを受けた卒業生からなるカッパ会が去る2月26日(土)午後6時より御茶ノ水ガーデンパレスにて開かれました。出席者は小山、長谷川明両教授を含む卒業生と手塚教授をはじめとする教員で総勢63名でした。会の主旨［楽しくお酒を飲もう］の通り、にぎやかで楽しくも懐かしい2時間半でした。次回にはさらに多くの方の参加を願っています。　(幹事　木村由美子)

# 薬学部校友会（桜薬会）が財政ピンチです

諸経費の高騰により薬学部校友会の財政がピンチを迎えようとしています。校友会の財政は会員各位が納付される年会費2,000円で賄われています。住所判明者8,000余名の会員が年会費を納入して下さればこれまで以上の校友会活動が出来ます。現在、年2回の会報、年1回の住所確認のほかクラス会、地方支部会の宛名印刷を行っておりますが、会報1回の出版経費は発送費込みで220万円です。会報には最近の話題を掲載するようにしており、全員に発送しております。しかし会費未納者に送付する経費が無くなりそうです。事務局では医療系の資格者（医師・歯科医師・薬剤師・獣医師）の連絡会（四師会）の結成、求人求職業務の充実を考えております。年間の経常経費が欠乏しますと、これらの事業が出来なくなります。**封筒の宛名ラベルの会員番号の後に☆印が付いていませんか。この☆印は年会費未納の印です。同封の振替用紙で早急に納付下さる様お願い致します。年会費は年2,000円ですが、事務管理の関係で10年分、又は5年分を前納下さるようお願い致します。**

# 会費納入報告

財務委員会

会費を納入いただきました会員の方々の名簿です。ご協力ありがとうございました。誤りが御座いましたらお知らせ下さい。なお、大学院在籍中の正会員は学生会員扱いとなり、学部卒業時に納入された会費は大学院修了年度まで凍結し、終了年度より正会員となります。　(平成11年9月15日～平成12年2月29日)

会費納入者

●2,000円納入者

56宮田節子58伊勢忠，根岸純子59木村清，角田律，永井順子，60斉藤文夫，坂田允，高野俊彦61小林陽三62松山裕治63泉沢晴子64山本実紀，清水紘代，中島正恵，向井葵65秋元敦信，平井清作67下田祥三69岸田邦雄72山下和代73栗田真理子，富沢恒夫74青木三秀76小林真美77広本正司79大橋教子80滝川喜久子，山崎健81名内愛，侭田和枝，三浦啓一82岡弘子，木村高久，西部拓也，馬島潔郷86栗田富美子，高松智90三澤江里子，若林範子，松本陽子，高橋美智子91極檀幸次92河合清93中井美貴96細谷義長，吉澤徹97古津みを98石崎純99種村葉子

以上 50名

●4,000円納入者

79三浦博子84梅田実85小圷秀和92貞包啓雄　以上 4名

●10,000円納入者

56相崎元衛，足立卯子，飯田龍男，岡本光子，瀬川祐司，塚本美智子，戸塚淳逸，三好恭子，吉澤秀明57赤坂洋子，斉藤允子，新庄勝助，田中陽子，野村博子，羽布津雅子，藤井篤範，松本忠，宮内トシ，森田允子58大塚高毅，小池雄一郎，金光継道，斉藤友美，白井正子，徳竹伯夫，徳竹喜子，前田和徳，森佳子59佐藤佳子，羽尾蕗子，牧野一郎60及川裕香子，加藤正信，窪田宏子，高橋恭子，林黎子，吉川郁子61石井静子，小沢経子，坂本壽子，高橋洋行，根岸ふき子，福田福男62会田洋子，加藤欣子63大野比奈子，三枝成男，武井侑代，豊島清麿，樋渡惟訓，実松昌汎64小野沢弘子，小島三千代，阪場建司65小根山正意，松岡寿夫66井上清明，江口静江，藤田博子，望月清見67津路紀子，渡部弘子68釘宮道子69小林京子，素村蕃彦70小野則夫，鈴木延子，鎗田一子71中野英明，服部悦治72会田直孝，石野喜子，中丸保，藤枝通子，水谷告73関根雅雄，安田勝紀74青木裕子，佐藤恵美子，鈴木雅富，南皇侍75天野叔子，大久保千春，小池勝也，古江輝紀76小原千恵子77尾島友子，志甫洋一，友松茂喜78阿部健一，大塚裕子，高石きく江，高橋光枝，津沢寿子，永野礼子79大原直子，三浦数典，山口尚子80増野浩81石井哲治，金子美恵子，小池昌子，小森谷友宏，武井美江，馬場文樹，宮下敦，渡辺一樹82久保光正，篠崎勝彦83多田治子84林田恵美子85栗城華枝，郡家まつ子，小林英文，嶋崎啓二86岡部佳郎，唐鎌清華87浅田雅子，小森泉，小森雄太，松居美佳，島田奈緒美，本東由香里88関根均，田中ひろみ89黒田一枝90大根有司，西村伸大，小林京子91河内朗，松田美香，佐藤洋子92松野有子，高間誠子，林裕崇93今村毅，大島亨子，小谷野奈緒，山口裕康94樋島学95佐藤亜紀96米納千賀子，濱屋千恵子97猪狩富夫，定永晶子98千葉俊介　以上 146名

●20,000円納入者

57山長みどり59楢崎近61稲垣普匡，山崎スミ子63黒沢美枝64北澄潤子，菅井昌子65瀧下満之，田口守亨66金子節子67小川雅子69小川仁志74牛込善彦，松永直樹79小野恵美，川島仁子80岡田真理子，笠原安輝子81柴田哲雄82田村悦子83堀口恭子84小早川隆，日高慎二85草間薫，鈴木久仁子87杉本裕子88箱守健二89伊藤雅代90宮澤義幸91赤尾純92小沢聡子93佐藤賀子98小林由芸江99安藤昌宏，桶川幸子，加藤圭太，川瀬和子，庄司優佳子，清水直子，鈴木正子，高橋雪葉，蓼沼理恵，戸澤亜希子，松木万智子，渡邊郁子　以上 45名

## 入会金納入者

○平成8年入学者

柴田祐一，松田史子　以上 2名

○平成9年入学者

金澤洋幸，木村奈緒美　以上 2名

○平成10年入学者

大野絵美子，小幡由紀子，蔭山恵美子，小嶋里永子，斎藤真視，佐々木亜希，野口佳子，三井沙恵，山口祐之，山本孝幸，吉永早和子　以上 11名

○平成11年入学者

朝香麻耶，赤川智宏，荒川順子，飛鳥馬宏，阿潟浜由佳，新井孝文，阿部芳世，有留真子，安倍のぞみ，浅川麻美，有賀千晃，飯塚大輔，伊藤弘泰，五十嵐理恵，伊藤秀範，池田尚美，伊藤文行，石橋麻弓，板垣史子，井上由紀子，飯塚雅文，伊藤聡美，飯田長正，井場由美乃，今井拓朗，今中佳美，入野大紀，内野三帆，宇津大蔵，大石真隆，太田智子，大友謙太郎，大谷朋美，尾崎洋介，加隈梨沙，香川茂紀，粕川恵理，加藤清香，海江田さくら，金子泰久，金田敦子，北村知穂，木村友香，木元慎一郎，清川育恵，久保寺弘典，栗田博己，呉大志郎，剣持香織，小出百合子，剣持沙織，国分洋治，小谷瑞紀，小林延敏，齋藤朋子，桜井里美，佐々木美恵子，佐藤直美，椎原啓介，重信谷亜，篠木知，島田友和，澁谷明仁，下田健一郎，新島梨恵，杉崎美緒，菅波龍太郎，菅原悠梨，酢崎友規映，鈴木雅之，鈴木未奈子，高木康男，鷹取なつみ，高橋由香里，瀧沢俊彦，竹林さや華，田中彩子，竹山美和，田村麻衣子，田中麻里子，土屋雄輔，坪井誠，積田真里，土居孝之，中尾英紀，永野恵梨，中村憲治，二瓶直子，野治洋之，橋本詠次，早川真由美，原淳一，原弘一，原田真理，樋口孝，樋口実恵，藤生典文，藤枝美名，伏木貴子，二見直樹，古山貴子，古川太一，古谷美野里，真野大貴，宮本智子，緑川武志，宮本紗ら，村上大介，柳澤由香利，八巻亨，山田俊二，山口陽子，結城誠，横田亜季，吉田智亮，横山泰子，吉田圭太，吉武美羽，和久田光宣，涌絢子，渡部雄一，渡辺葉子，及川裕美，柳雅子　以上 124名

## 会員動向

会員数（平成12年4月1日現在）

| | 人　数 | 前年比 |
|---|---|---|
| 正 会 員 | 9,237 | ＋247 |
| 学生会員（正会員31含） | 949 | －17 |
| 特別会員 | | |
| 薬学部教職員 | 62 | |
| 退 職 教 職 員 | 33 | |
| | 10,250 | ＋224 |


発行日　平成12年3月25日
編集人　日本大学薬学部校友会事業委員会
発行人　日本大学薬学部桜薬会会長　原田貞亮
印刷所　白洋印刷K.K. TEL 03－3352－5631
発行所　千葉県船橋市習志野台7－7－1
日本大学薬学部内（〒274-8555）
電話・FAX　047－465－1478（直通）
振替口座番号　00140－0－53798
振替口座名　日本大学薬学部校友会